

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 橋本 剛明

本論文は、規範侵害場面を知覚した個人が、侵害者への制裁や寛容に動機づけられる心的過程について検討したものである。6つの実証研究を通し、謝罪という状況要因と、状況に対する判断者自身の影響力の要因（「勢力感」）の影響を検討し、侵害者への態度が規定される過程を明らかにしている。本稿は、理論的背景と目的について論じた第1～5章、実証研究を提示した第6～11章、そして総合考察を示した第12章により構成されている。

第1章から5章までの理論編では、社会的侵害場面における非当事者の反応に注目する意義と、とりわけ侵害者への制裁と寛容というプロセスが果たす社会的機能について議論した上で、そのような心理過程を構造的に理解・予測しモデル化するにあたっては、「勢力感」という要因をその中核に据える必要があるという点を示している。

実証編のうち、第6章では、犯罪場面を題材とする調査研究の結果から、個人差として高勢力を認知する個人ほど、加害者への制裁的態度を強く表明し、同時に加害者の謝罪を想起した場合には寛容も表明しやすいという、勢力が持つ二面的な効果を明らかにした。

第7章では、企業不祥事を題材に、より厳密に勢力感と謝罪を操作した実験的検討を行い、企業の処遇への影響力を与えられた個人ほど、企業による謝罪の有無という文脈的要素に応じ、より制裁的にも、より寛容的にも反応しやすいことを確認した。第8章では、引き続き企業不祥事を用い、企業への直接的な影響力のみでなく、無関連な事前課題により強められた勢力感が後続の判断に波及的に影響し、謝罪への反応を変化させることを示した。

第9章では、実験的に操作された勢力感が、個人が実験室場面の中で相互作用する規範侵害者の謝罪への反応を規定し、行動レベルでの攻撃反応を調整することを明らかにした。

第10章と11章では、勢力の効果が認められる条件について検討した。公正信念や、謝罪の誠実さなどを交えた検討の結果、特に謝罪を行なう侵害者を許すべきかという葛藤が経験される際に、個人が寛容的反応を表出するかを勢力が強く規定することが見出された。

第12章の総合考察では、得られた一連の研究知見を整理し、既存の公正判断研究への理論的貢献について論じるとともに、知見の実社会への応用可能性について、様々な領域における葛藤場面と関連づけながら議論を展開した。

本論文は、侵害状況について個人が判断を行なう際には、判断者自身と状況との「関係性」が態度形成の重要な一因になるという点に着目し、それを「勢力感」という具体的な変数に落とし込み、緻密なモデル化に成功している。研究手法や侵害の種類など、複数の条件を織り交ぜながら一貫した実証結果を着実に積み重ね、頑健性と一般化可能性の両面で高く評価できる知見を提示したことは、学術的に大いなる成果である。よって、本審査委員会は、本論文が博士（社会心理学）の学位に相当するものと判断した。